

## 名取市婦人防火クラブ連絡協議会 ヒアリング記録

日 時 9月11日（日）10:30～

場 所 名取市消防本部 会議室

参加者 江口 清子 さん （前名取市婦人防火クラブ連絡協議会会長・県婦防副会長）  
高橋 則子 さん （現名取市婦人防火クラブ連絡協議会会長）  
庄司 公子 さん （下増田地区副会長）  
菊池 せつ子 さん （館腰地区副会長）

名取市消防本部 今野 権藏 消防司令長

### 1. 背景

名取市は仙台市のすぐ南側に位置し、人口は約7万3千人・2万6千世帯。

仙台市内に通勤している人も多い。漁業・農業も盛んで、古くからヒラメやカレイなども多く取れたほか、加工品としての蒲鉾、農業では稲作のほか、野菜や花栽培等も盛んである。海岸沿いの市の南側には、岩沼市と敷地をまたぐ形で仙台空港があり、今回の大震災では、下増田地区を中心に多くの人々が空港ビルに避難している。

東日本大震災による被害は、宮城県による9月16日時点の発表によると、死者911人、行方不明者71人、重症14人、軽傷191人、家屋は全壊が2803棟、半壊949棟、一部損壊8739棟に上る（床上・床下浸水については調査中）。火災も12件発生。特に被害が大きかった地域は、太平洋岸の閑上地区と下増田地区である。

この両地区はあまりに被害が大きかったため、それ以外の6地区の婦人防火クラブが協力しあい、名取市ボランティアセンターとの連携のもと炊き出し支援を継続して行った。閑上地区の婦人防火クラブでは、住民が離散してしまっていることから、現在でも地区内の10地域のうち、3地域からしか役員を出せない状態である。しかし、活動の重要性は地域で認められているところであり、組織は維持しつつ復興の状況をみながら、無理のない形での再開を検討していきたいとしている。

### 2. 詳細

#### ①各地区の状況

##### ■閑上地区（江口 康子）

今回の震災では、海岸沿いの閑上地区と下増田地区がたいへんな津波の被害を受けており、海岸沿いの地域とそれ以外の地域では、かなり様子が違う。

わたしは閑上地区に住んでいるが、婦人防火クラブの総会に向けた会合のため、公民館で役員会を行っている最中に地震が起こった。次々にけが人が車で運ばれてきた。本当は去年の地

区運動会で人が出たため、公民館に担架を設置してほしいと要望してきたが、残念ながら設置されていなかった。担架も無い中、わたしもおばあちゃんだが、玄関にあった立て看板を使って無我夢中で公民館の中に運んだりした。本当に悲惨な状態だったし、その運んだ方が助かったのかどうかもわからない。

公民館は働く婦人の家なども併設されていたが、公民館と働く婦人の家でそれぞれ幼稚園と中学校の卒園・卒業式の謝恩会がおこなわれていたため、園児と中学生とその親御さんたちで大変な混乱だった。

地震後 20～30 分ほどそこにいたが、津波が来るという情報が流れて公民館周辺などに避難者があふれる中、自分は自転車で 20 分ほどの自宅へ必死に戻った。途中津波が来ていたのだろうがわたしは見していない。自宅の 100 メートル手前で津波がたまたま止まり助かったが、そうはいつでも、今の会長さん、副会長さんには申し訳ないが、とても支援活動に動けるような地区の状態ではなかった。

## ■増田地区・上浦地区（高橋 則子）

自分は増田地区でお店をしているので、わたしはまずお客様がパニックにならないように対応をしていた。周囲ではブロックが崩れたりしており、これが宮城県沖地震なのか？と思ったが、津波はあまり頭に無く、ラジオによる放送もはっきりは頭に入ってこなかった。津波が来るようだと言ったが、もし来たとしても、去年のチリ地震の時で 50 センチ程度だったので「大したことはないだろう」というような気持ちだった。

自宅の中はめっちゃくちゃになったが家族から直後に連絡があつて安否は直後に幸いとれていたので安心した（その後はまったく電話は通じなくなった）。

しかし当日は全く状況がわからない状態の中で、立て続けの余震に見舞われていた。何かしなければならぬという意識があつてもどうしてよかわからない状態で、おそらくみなさんとはにかく片づけなどをしたりしていたのだと思う。

2 日目、ラジオをつけたらすぐ隣の仙台市の荒浜地区に遺体が 200 人などと報道されているのを聞いて、とても信じられない思いだった。

住まいは上浦地区で、3 日目から支援に動きだした。公会堂に 40 人ほど集まり、2 日ほど町内会のほうを手伝ったが、婦人防火クラブの役員として 9 年も携わっているので、次にどうするか考えながら、増田小学校を訪ねると炊き出しをやっているのでもう少し早く来ればよかったと思いつつ、その場を手伝った。閑上地区からの被災者が殆どで、当日は 700 人以上、その後もしばらく 400 人ぐらいは生活されていた。

本当はいろいろな方へ声をかけられればよかったのだけれど、みなさんそれぞれがいっぱいいっぱいの状況で、しかも電話連絡がまったく取れない状況だった。したがって、まずは自分ができることを行動しながらはじめていった。

## ■下増田地区（庄司 公子）

わたしは当時自宅にいて、ゆれのあと電気がストップしたのでラジオ付けると津波来るといので、公民館へ駆けつけたが、しかし避難者数がとても多いので、下増田小学校へ移動した。

夫とともに下増田小学校の屋上に逃げ込んだところ、その直後にすぐそばの増田川が増水し、ガレキ、車、人が流されていったが、その後 4 時には雪がしんしんと降り出した。閑上街道の東側の住宅と宮城農業高校がひどい被害をうけ、お母さんたちがはだしで子どもを抱えて逃げてくるような状況。

その日の夜は、小学校の教室に 20～30 人ずつ分かれ一夜を明かし、翌日は学校主体で校長

先生の指導のもとで協力しあって過ごした。たまたま石油ストーブがあったので、クラスごとに交替で使用して温まりあった。当日は何も食べるものが無かったが、2日目は食パン1枚にバナナといった形で食事が配られはじめた。わたしは5日間学校にいたが、自宅は津波の被害はのがれたので、その後は自宅にもどった。

被災者は、3月25日まで校舎で過ごしたが、3月26日からは体育館に移動し、そこから炊き出しが開始されたので、わたしも参加した。あまりに被害がひどく婦人防火クラブとしては活動が無理だったので、地域のボランティアの会の会長さんや、JA関係の会長さん、民生委員さんなどと声を掛け合い協力しあって炊き出しを毎日おこなった。自衛隊の協力もあり助かった。朝は6時、昼は11時、夜は6時～作業を開始して1日3食提供した。

なお、小学校では低学年の子どもを先に帰しており、そのうちの何人かが津波の犠牲になっている。

## ■館腰地区（菊池 せつ子）

館腰地区の中でも、特に自分が住む本郷地域はあまり被害がなく、家具が倒れたといった感じだったが、館腰地域は屋根の被害を受けたところが多かった。しかし東部道路で津波がとまったこともあり、東部道路がなかったら私たちの地区もどうなっていたかわからないねと、地域の方たちと話をしている。

わたしの住む本郷地域には、隣の岩沼市の矢野目地区の方たちが本郷集会所に避難してきたので、その支援が必要になったが、婦人会がリードしていたのでそれを手伝う形で一緒に3カ月ほど炊き出しを行った。住まいもなく行くところがないということから支援を継続した。周辺は農家の方も多いので、おコメなどをいただいて賄ったが、工夫をこらし、なかなかよいメニューで提供できたと思う。

地震の2・3日後には、婦人防火クラブの総会を予定していたので、頼んでおいたお赤飯がとどいてしまった。そこで役員さんの中に、オール電化で調理器具が使えず困っているお宅などへそれをもっていってもらったりした。他にも環境が厳しいお宅が何軒かあって、ご飯やおかずを届けたりした。

自宅のお風呂も提供した。岩沼の方だったが、ひと組のつもりが、4組もワゴン車でいらして24人も入っていただいた。その後も時々お風呂の提供をしたが、館腰地区の人は同じようにお風呂にいれて差し上げるケースが多かったようだ。

他の地域は全戸加入で婦人会とも重なっているのであまり問題はないが、館腰地区は途中で婦人会と防火クラブが別組織になったので、いざという時に難しい側面もある。

## ②全般（婦防全体としての活動や個別課題など）

### ■市婦防としての取り組み（高橋則子）

1週間ほどして電気が通じ、電話も何回もかけているうちに通じるようになったので、各地区の会長さんに電話をして連絡を取り合った。江口会長のお宅は通じるのにだいぶかかり、ご自宅も知らなかったのが安否がわからなかった。

個人として活動していた増田小学校も、日にちがたつと避難者数が少なくなっていったことから、やはりこのままでいいのか、という思いが出てきたため、市役所に連絡して「婦人防火クラブとして何かできないか？」と相談すると、個人ボランティアを受け付けているので、そちらに行ってくださいという。

しかし婦人防火クラブはせっかく組織としてやっているのだから、個人ボランティアとして活動するということも違うのではないかと、市役所の方から「会長はどなたですか？」と聞かれたので、江口会長のお名前をだすと、すぐにわかってくださった。しかしまた今度ゆっくりお話を聞きますのでと言われてしまい、これは何か組織として順序があるのだろうと思いたち、安否もご自宅の正確な位置もわからない中、江口元会長のお宅を訪ねた。

「生きてらしてよかった〜！」と本当にほっとしたが、大変な状態にある江口会長に無理を言って、まとめ役として動いていただきたいとお願いし、江口会長に市役所に来ていただいて、社会福祉協議会のボランティアセンターの責任者に直接に話を通してもらい、婦人防火クラブとして4月8日から活動を開始した。6地区の会長さんで集まってもらって相談したら快く賛同して下さって、名取市は8地区に婦人防火クラブがあるが、被害のひどかった閑上地区と下増田地区をのぞく6地区のクラブに協力してもらって活動していただいた。

地震直後はだれもが大変なので、すぐ動くのは難しいとは思っていたから、よい時期だったのかなとおもった。江口さんからは活動記録をつけるように、とアドバイスをしていただいたので、日々の様子を記録していった。

普段から研修をしたりして、交流も行っていたので、そういう関係が良かったのかなと思っている。

## ■ 昨年のチリ地震による津波警報・避難経験の影響（江口 清子 ほか）

昨年のチリ地震で津波被害警報が出たときも、公民館には200〜300人の避難者がいて、わたしはいつ召集がかかってもいいようにと公民館に待機していたが、市の災害対策本部と現地に私を知る人がいたため、働く婦人の家において、お湯沸かし乾パンを渡す活動をした。でも炊き出しはだめだと言われ、本当は現地に任せてほしかったと思っている。

こうした公的避難所には、権限のある職員を派遣するなど、現場の裁量が効くようなシステムが必要だろう。公民館長も気の毒だった

16時ごろになったらおむすびが配布されたので、わたしは早めに自宅に戻ったが、その夜は、避難者のみなさんから文句がでたという。避難所環境自体がひどい状況だったので、それがトラウマで今回は逃げなかった側面もあると思う。

## ■ 津波警報とその後の行動の間の齟齬

孫など、子どもの帰りを待っていて犠牲者になった方が結構いたようだ。子どもはすでに親が引き取っていた、というケースもそれなりにあったにもかかわらずである。またこの日は中学校の卒業式で、学校がお休みのため家で亡くなった中学生もいる。この警報と実際に津波が起こる間に、家に何か取りに戻った人が多かった。

## ■ 津波ハザードマップの想定とガレキの中の搜索の困難さ（消防）

津波ハザードマップは各世帯に配布されていたが、50センチ程度の想定だった。当日は全く様子が見えなくて、津波が引かないので現地にも入れず、すぐ夕方になってしまった。

12日朝、明るくなって活動を開始。11日の夕方、現地を出て昼前に名取市に到着した富山の緊急援助隊も人命救助で現場に入ってくれたこともあってようやく全体が見えてきた状況。

水が引かないので現場に入っていけないというのが最も厳しかった。しかしガレキがひどく、もっているゴムボートがガレキで敗れて二次被害になる可能性もあり、たいへん状況が厳しかった。一艘だけアルミボートがあったので、それを11日の夕方から出して搜索活動を行った。

## ■壊滅的被災地域における組織の今後

現在、特に津波被害のひどかった地域の婦人防火クラブの今後の在り方について模索が行われているが、住民自体がばらばらになってしまっていたり、またいろいろな厳しい経験つらい体験をしたことから、まだ人前に出たくないという人も多いという。仮設住宅も元の地域から遠くかなりばらばらに入居しており、連絡先が分からない状態で、仙台に行った人もいる。

そのため、総会も開けない状態の地区もあるが、壊滅的な状態の地域を外して総会をするわけにもいかず、かといって組織を潰してもいけないので、総会を開いてはどうかとお問い合わせいただいた組織に対しては、様子を見たいとして、いましばらく待っていただいている状態だという。

例：関上地区は壊滅的な被害をうけたため、地区内の10地区中、現在3地区のみしか役員さんが出てこられない状況。婦人防火クラブはもうやめてしまおうか、との意見も出たが、無くしてしまったらゼロから立ち上げるのは大変であるということで、とりあえず組織はそのままとすることとしている。

## 3. 今後に向けて

### ■分析

○高橋会長は、市婦防としての活動を模索して炊き出しを行った経緯を振り返り、1人の力のもつ限界と、組織として行動することの大切さを感じ、今後の課題として、市との連携をきちんと位置付けていくことの重要性について発言された。名取市内の女性組織が合同で顔合わせするような場に参加したことはないとのことであった。

○名取市では、地区としての各婦防の活動は活発であるが、市レベルの婦防（連絡協議会）は、飾りだよ、といわれてきた側面があるという。任意団体ではあるが、市からの助成金もあり、防火・防災の担い手としての女性の役割があるのだから、しっかり頑張りたい、という思いと同時に、あまり強くぎりぎり使命感を持って、ということを経験の皆さんに押し付けると、役員のなり手がなくなってしまうのではないかと、懸念も出された。

○今回の地震では、役員改選が多い年度だったことも影響もあるという。ある地区の会長は、新しく交代した直後であり、まだ市の婦防の総会が開かれる前だったため、地区の役員の方のことしかわからず、全体のことがわからないままに活動してきた状態だという。引き継ぎがうまくいっていればよいが、なかなか難しいとの感想であった。

○役員の交代は二年がよいところだが、高橋会長のように役員を9年続けているケースもある。消防本部としては、少し長めに役員を務めてはどうかと、お声をかけることもあるというが、現実は難しいという。

○そうはいつても、今年の6月12日に実施された、宮城沖地震に備えた防災訓練でも、各地区ごとに婦人防火クラブのメンバーが積極的に訓練に参加していたということから、地域全体の活動へのポテンシャルは非常に高いと評価できる。

## ■その他

○炊き出しも重要だが、被災者の特に女性たちはほかにも洗濯ができずに苦勞するなど、暮らしの視点にたった支援が必要との意見も出された。災害支援に関しては、くらしの感覚を持つ女性の視点による計画・立案が求められている時代でもあり、今後の活動が期待される。

(以上)